

厚生科学研究費補助金

障害保健福祉総合研究事業

重症心身障害児のQOL向上を支援するための衣生活に関する研究

平成13年度 総括・分担研究報告書

主任研究者 多屋 淑子

平成14年度（2002年） 4月

目次

I. 総括研究報告書	-----	1
重症心身障害児のQOL向上を支援するための衣生活に関する研究		
多屋淑子		

II. 分担研究報告書	-----	13
重症心身障害児の衣類に関する研究（その2）		
中村博志		

厚生科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）

総括研究報告書

重症心身障害児のQOL向上を支援するための衣生活に関する研究

主任研究者 多屋淑子 日本女子大学教授

研究要旨：重症心身障害児は、一般に健常者に比べて、身体の変形が見られ、四肢部が細いという身体形状の特徴がある。そのため、身体サイズと衣服サイズとが不適合な衣服を着用している場合が多く、さらに、オムツを着用する機会が多いために、既製衣服では腰部でサイズが決まってしまうため、特に上部や下部のゆとり量が過多となる場合が多い。このため、重症心身障害児の衣服内環境は健常者と異なることが予想され、その対策が必要である。今年度の研究においては、身体サイズと衣服サイズが異なる場合ならびにオムツを着用している場合の衣服内環境に与える影響について健常者との違いを検討した。静止立位状態では、同サイズであっても、着装形態の違いにより、衣服内の静止空気層は変化し保温性に影響を与えることがわかった。また、乾燥している場合のオムツ着用による保温効果が認められた。しかし、重症心身障害児の生活では、排泄物などによる湿潤状態が考えられるため、一概にオムツが保温性を高めるとは言えない状況にあり、むしろ濡れたオムツを着用している時に放熱量の増加が予想される。衣服サイズが不適合の衣服を着ていると、衣服内の各部位の空気層分布が不均一になり、それに伴い身体表面温度のばらつきは大きくなる傾向を示した。今後、重症心身障害児の衣服による生活支援を行うとき、重症心身障害児の衣服内環境が起因する衣服の熱抵抗値の低下や不均一度の増大をいかに改善するかが大きな課題である。

分担研究者 中村博志
日本女子大学教授

1. はじめに

障害を持つ人たちの生活向上を支援するため、様々な試みが進められている。衣服に関しては従来から、ファッション性、耐久性、着脱動作などについての検討が行われてきた。しかし、その多くは身体機能にのみ障害を持つ人を対象としたものであり、心身ともに障害を持ち、意思や感情の表現が困難な重症心身障害児のための衣服研究はなされていない。重症心身障害児が衣服に何を求めているのかを、周囲の人が理解することは難しい。そのため、衣服の着心地の悪さなど種々のストレスを抱えていることが予測される。今年度の研究は、重症心身障害児が快適な衣生活を送れるよう、

着心地の良い衣服を提案するための衣服の問題点を把握することを目的とする。昨年度の研究結果¹⁾における「重症心身障害児(者)の衣生活実態調査」より、重症心身障害児は一般に健常者に比べて四肢が細く、身体サイズに合う適切な既製服がないという問題が提起された。そこで重症心身障害児と健常者の衣服内環境の特徴を明らかにするため、身体サイズと衣服サイズとの適合性の有無、煙突効果とあんどん効果の視点による着装形態の違い、活動量の違い、オムツ着用の有無の条件について重症心身障害児の衣生活を模擬した着装モデル実験を行った。皮膚温、衣服表面温度、衣服内温湿度、および着用時の感覚を計測し、重症心身障害児の身体的な特徴と温熱的な着心地に関する衣服内環境について検討を行った。

2. 研究の方法と対象

昨年度の研究から、重症心身障害児の衣服は、身体サイズと衣服サイズの不適合が顕著に見られ、健常者と衣服内環境が異なであろうことが問題となった。そこで、本研究では、重症心身障害児と健常者の活動量の違いとオムツ着用の有無の違いが衣服内環境に与える影響を明らかにすることを目的とし、両者の違いを明らかにするために、身体サイズと衣服サイズとの適合性の有無、煙突効果とあんどん効果の視点による着方の違い（図1）、重症心身障害児の衣生活を模擬した着装モデル実験を行った。実験用衣服サイズの不均一性の検討については図2に示すような衣服の組み合わせによる実験を行った。

実験には、体幹部における身体サイズと衣服サイズの適合性が保温性能に与える影響について検討した。さらに、煙突効果とあんどん効果の2種の着装モデルを用いて、衣服の着方の違いによる保温効果に与える影響も検討した。

一般的に、適切なゆとり量が保持できない場合、保温力は低下するといわれている。

衣服の着方について、衣服内の熱気流の移動の違いから、図1に示すように煙突効果とあんどん効果の2つの着装形態モデルを想定した。ここで、煙突効果は衣服内を熱気流が下から上に吹き抜けるモデルであり、あんどん効果は下部からの熱気流が衣服の上部から通気することなく、滞留していることを示すモデルである。

さらに、衣服と身体サイズのアンバランスによる違いを明らかにするために、図2に示すように、3種のサイズの衣服を組み合わせ、身体と衣服サイズが適合している場合を健常者タイプとし、不適合である2例を重心タイプIとIIとした。用いた衣服サイズは、上衣サイズ M、L、LL の3サイズの衣服の組み合わせを変化させた。これらより、身体サイズに合わない衣服サイズを着用した時に衣服内環境がどのように変化するかについて、着用実験による生理情報と感覚情報の計測、およびサーマルマネキンを用いた着衣の熱抵抗を計測し、検討した。

測定項目は、生体情報は、身体各部位の皮膚温、直腸温と主観的な温熱感覚情報であり、衣服内環境は温度と湿度、さらに衣服表面温度と着衣の熱抵抗値であった。

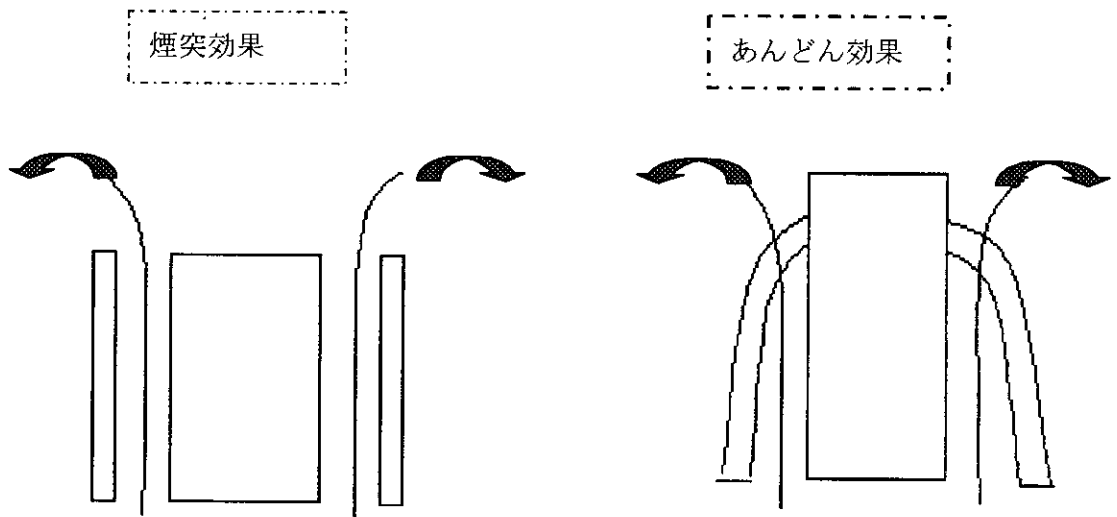


図1 着装形態の違い

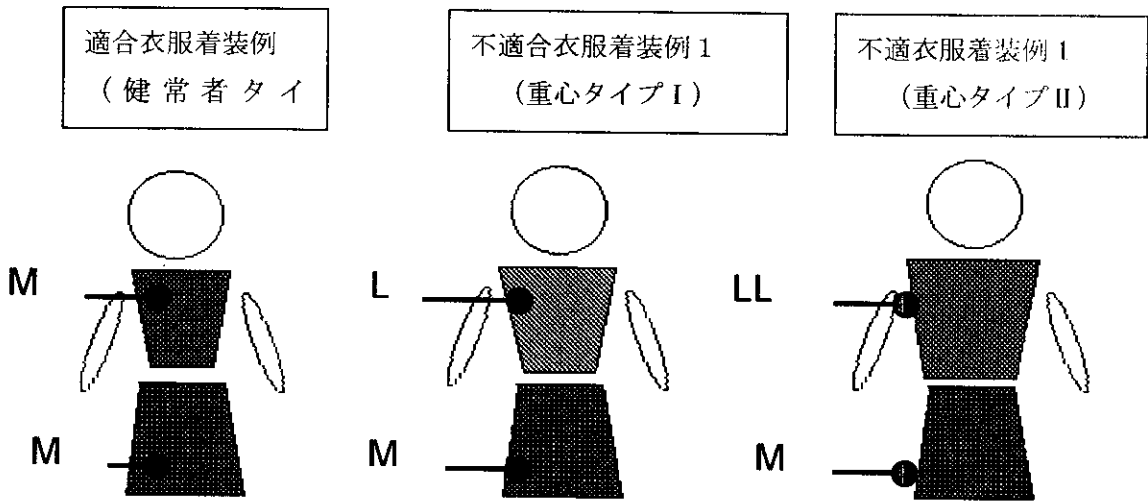


図2 実験用衣服の組み合わせ

3. 結果および考察

3. 1. 着装形態とサイズの異なる衣服の保温効果の検討

着装形態とサイズの異なる衣服の保温効果について、被験者の平均皮膚温から検討した。

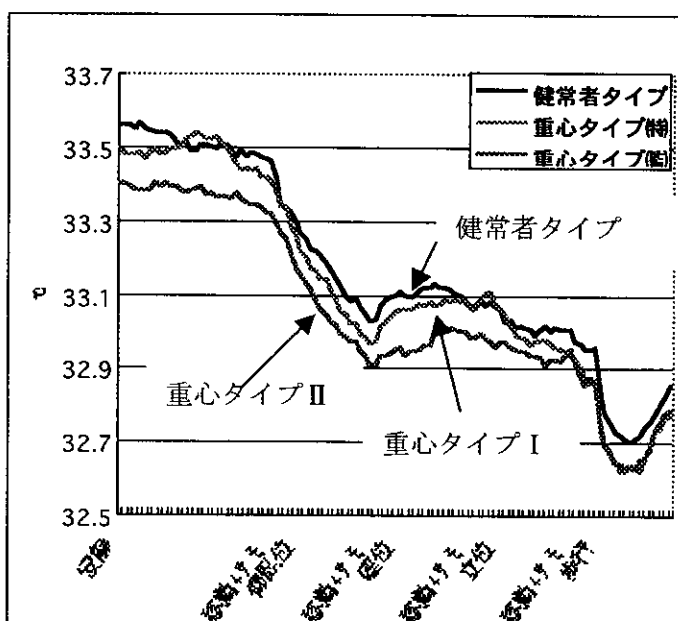


図3 着装タイプ別の平均皮膚温

図3に示すように、着用衣服と身体サイズの不適合が大きいほど平均皮膚温は低下し、身体サイズがMサイズの時、LLサイズを着用している時が、温熱感覚評価も評価が一番低いことが分かった。

次に、着装形態別に見てみると、衣服内の熱移動の違いによる煙突効果モデルとあんどんモデルの違いが見られ、煙突効果モデルでは、身体サイズに適合するMサイズを着用している時が一番皮膚温が高く、すなわち保温効果が大きく、一方、あんどん効果モデルでは身体サイズよりも一回り大きいLサイズを着用した時が一番高い平均皮膚温を示し、そのときの保温効果が大きいことが観察された。(図4)

このことから、着衣の保温効果は、着用衣服が被験者の身体サイズに適合している時、M、Lといったサイズの規格によるゆとり量の違いよりも、煙突効果やあんどん効果といった衣服の着装形態の違いによるゆとり量の変化や衣服内の対流の影響が影響していることが明らかとなった。

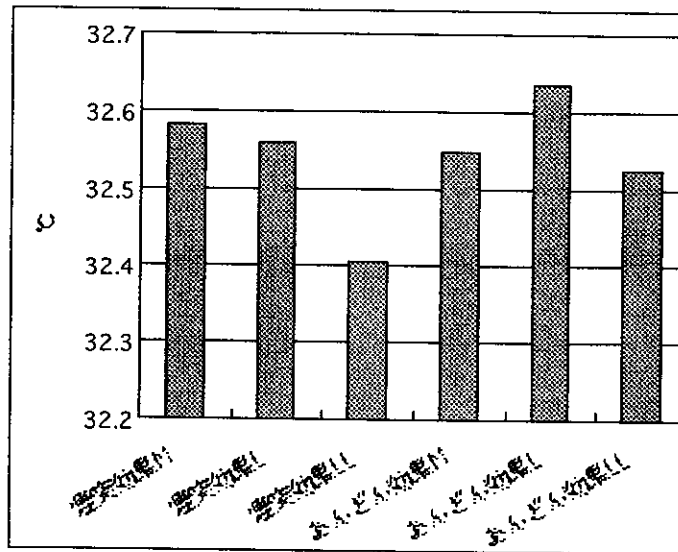


図4 着装とサイズが異なる衣服着用時の平均皮膚温

衣服の保温性能をサーマルマネキンを用いて計測し、その結果を図5に示す。サーマルマネキンは、被験者実験とは異なる計測値を示した。サーマルマネキンと被験者では、同姿勢でも保温効果に差が生じ、煙突効果においては逆の動向を示した。これは、マネキンは人体と異なり常に静止状態であるため、衣服内は常に一定の静止空気層を保つことができるため、空気層の一番多い LL サイズが一番保温力が大きいという結果になったと考えられる。

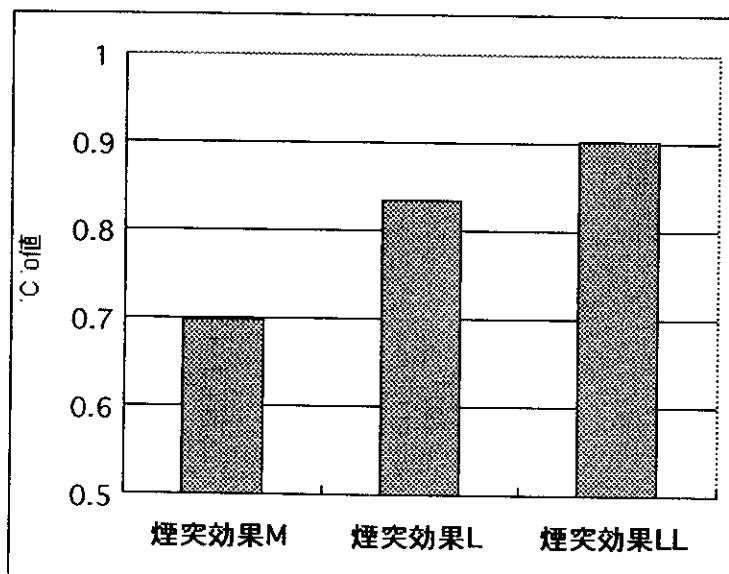


図5 サーマルマネキンによる着衣の保温力 (Clo 値) の計測

しかし、被験者実験では衣服内環境の対流はさほど生じていなかった。そのため、サーマルマネキンと生体による被験者実験の計測値の差異は、人体形状の特性や生体特有の揺らぎが原因となり、衣服内の空気層の形状変化が原因であると考えられる。また、図6に示すように、被験者の着用感評価においても、LLサイズが最も低い評価であることから、身体に不適合の衣服を着用したときは、衣服の保温効果が著しく低下しているといえよう。

一般に、着衣の保温力は、サーマルマネキンによる計測結果が用いられているが、この実験により、被験者の身体形状が複雑であったり、動きを伴う場合には、適切な計測値が望めないことに注意を払うべきであることが判明した。特に、今回の研究対象である重症心身障害児のように身体の形態がさまざまであり複雑である場合には、以上の理由から、サーマルマネキンによる計測データを使用して議論することには無理があり、被験者実験の有用性が明らかとなった。

しかし、重症心身障害児による着衣の保温効果を計測することは非常に困難であり、健常者によるモデル実験が行い検討する必要がある。

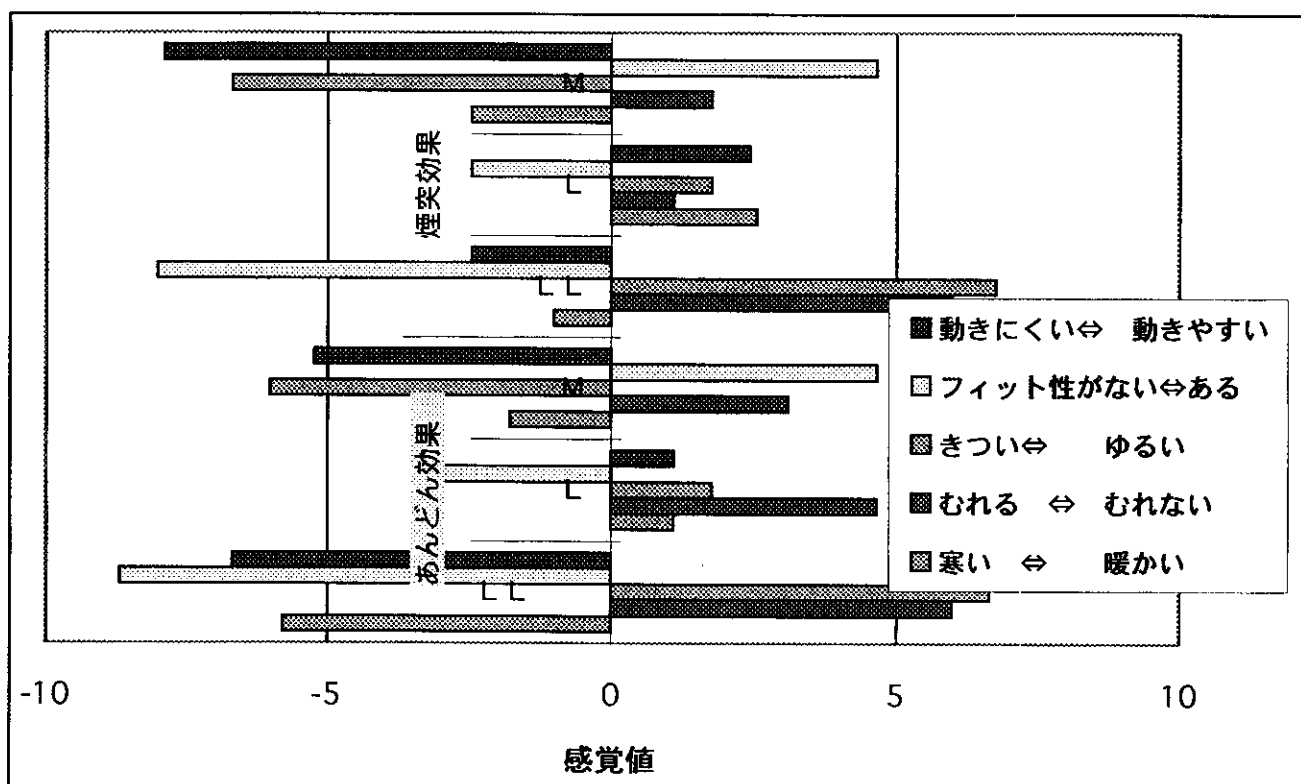


図6 着用感覚評価

3. 2 オムツ着用時の衣服の保温効果

一般に、重症心身障害児はオムツを着用している場合が多く、腰部周囲の衣服容量が健常者に比べて大きいことを特徴としている。そのため、着用衣服は腰部の大きさに合わせて選定されるため、身体サイズよりのかかなり大きいサイズの衣服を着用している場合が多いようである。そこで、これらの重症心身障害児特有の衣服の特徴が由来する着衣の保温効果について明らかにし、その対策を考えるために、図7に示すように、四肢部のゆとり量やオムツ着用の有無などから着装形態モデルを考え、健常者によるモデル実験を行った。

測定項目は衣服内の温湿度、各部位の皮膚温、平均皮膚温、衣服表面温度とした。活動条件は、仰臥位、座位、立位、歩行（時速3.6 km）とした。

図7の各モデル実験により平均皮膚温を観察すると、着装形態別に比較を行った結果、健常者タイプ>重心タイプI>重心タイプIIの順に高い傾向を示した。このことから、身体に適したサイズを着用している時では身体周囲に適度の断熱効果の高い静止空気層が存在し、その結果、衣服の保温力が高くなると推測される。

また、重心モデルのように、身体サイズに適合していない衣服着用の場合は、着衣の保温力が低下することが明らかとなった。したがって、日頃、身体サイズに対し、不適合なサイズを着用している例が多く見られる重症心身障害児の衣服環境は、健常者のそれに比べ特に保温力に関して対策が必要であることが指摘できる。

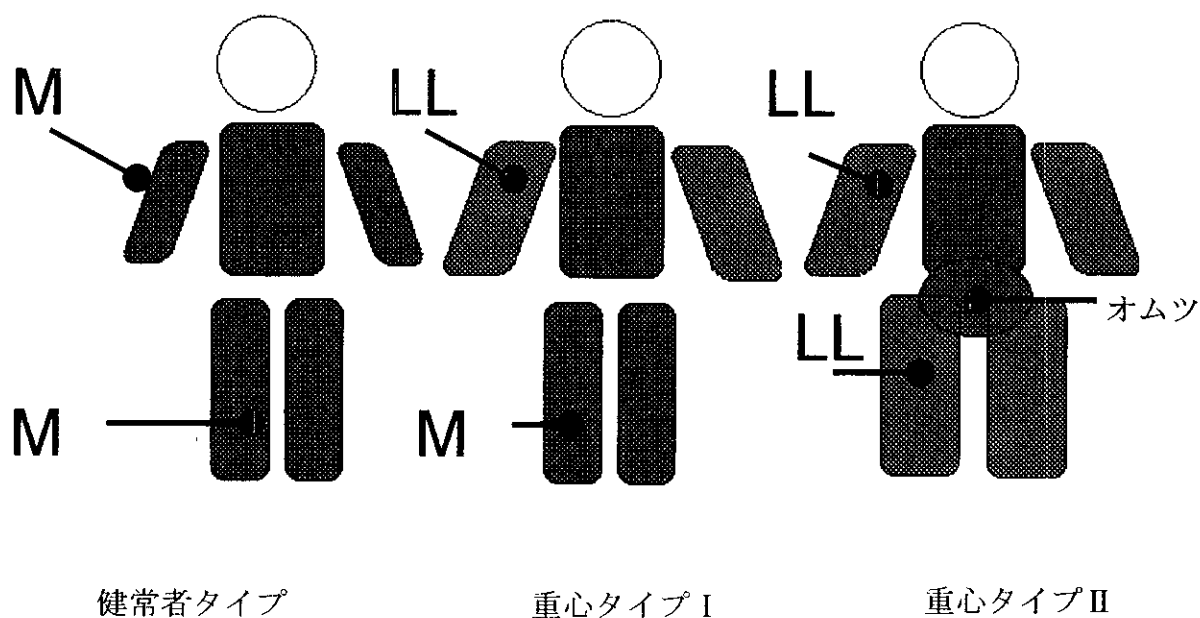


図7 オムツ着用時のモデル実験

次に、皮膚温について考察すると、身体の皮膚温は、襟口、腹部、腹部下位 10cm と身体の下部位に行くに従い、着装タイプ間における皮膚温度の差が大きくなり、身体の下部位に行く程、皮膚温の変動が大きいたことが示された。この理由として、衣服内には、衣服サイズと身体サイズの適合性により、種々の空気層が形成され、それらが衣服内の熱挙動に影響を与えたためと考えられる。

しかし、腹部下位 10cm の皮膚温においては、オムツを着用している重心タイプⅡモデルのみ、座位時の皮膚温低下が観察されなかった。これはオムツ着用による保温効果が認められたことを示しており、座っている時には乾燥しているオムツ着用の場合にはそれが保温効果となっていることを示している。濡れている場合には、濡れによる熱伝導が大きくなり、身体からの放熱が大きくなり、保温効果が減少してることが予想される。

図8に、オムツ着用時と未着用時の衣服表面温度の計測例を示す。

図8より、オムツを着用している時は衣服表面温度が未着用時に比べ、低く、オムツによる保温効果が顕著に認められる。

四肢部が細く、オムツ着用のため特に下肢部のゆとり量が過多である重症心身障害児の衣服内環境は健常者と異なることが明らかとなった。

今後、重症心身障害児の衣服による生活支援を行うとき、重症心身障害児の衣服内環境が原因となる衣服の熱抵抗値の低下や不均一度の増大をいかに改善するかが大きな課題となるであろう。

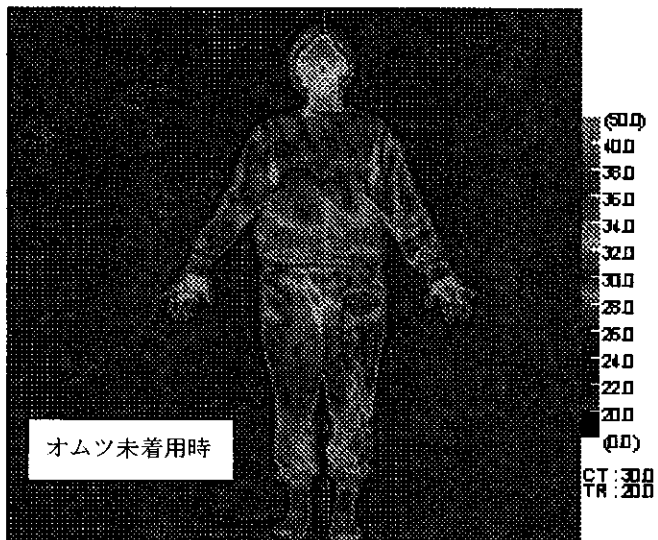


図8 オムツ着用時の保温効果

4. 結論

本研究では、重症心身障害児（者）の衣服による生活支援を目的とし、昨年度の研究をもとに、重症心身障害児の身体的な特徴と温熱的な着心地に関する衣服内環境について、体幹部におけるサイズと着装形態別比較実験による「着装形態とサイズの異なる衣服の保温効果の検討」及び四肢部におけるサイズと活動条件別比較実験による「オムツ着用時の衣服の保温効果」について検討した。

3. 1の「着装形態とサイズの異なる衣服の保温効果の検討」では、被験者とサーマルマネキンとを使い、体幹部におけるサイズ、煙突効果とあんどん効果の視点による着装形態の違いについて実験を行った。

その結果、被験者実験において、皮膚温、着用感とも LL サイズにおける評価が一番低いことがわかった。また、煙突効果では M サイズが、あんどん効果では L サイズが高い皮膚温が観察され、保温効果が大きいことがわかった。着用衣服が被験者の身体サイズに適している時には、M、Lといったサイズの規格によるゆとり量の違いよりも、着装形態の違いによるゆとり量の変化や対流が与える保温効果への影響のほうが大きいことがわかった。

腹部において表面温度と皮膚温の差を算出した際、あんどん効果モデルに比べ、煙突効果モデルの差は著しく大きくなった。腰部での締め付けがあるあんどん効果では、体表面から衣服までの間隙量が減少し、保温効果を低下させるのに対し、煙突効果は締め付けがなく、衣服内の適度な空気層を維持しているため保温性が高くなったと考えられる。

また、同姿勢でもサーマルマネキンと被験者では保温効果に差が生じ、煙突効果においては逆の動向を示した。これは、マネキンの衣服内では静止空気層が保たれるため、空気層の一番多い LL サイズが高いクロー値を示したと思われる。それに対し、被験者の衣服内環境では対流は起こらないものの、人体特性の揺らぎが生じるため LL サイズの平均皮膚温が適合サイズの衣服よりも著しく低い値を示したと考えられる。また、被験者の着用感評価においても、LL サイズが最も低い評価であることから身体不適合の衣服は保温効果を低下させると推測される。

したがって、サーマルマネキンによる保温性結果が被験者にそのまま反映されるとは言えず、特に重症心身障害児に見られる身体形状の変形がある場合には、被験者実験の重要性が考えられる。

また、生活行動が与える影響についても検討する必要があると考えられた。

3. 2の「オムツ着用時の衣服の保温効果」では、健常者である被験者を用いて、活動量の違い、四肢部サイズの違い、オムツ着用の有無を合わせた重症心身障害児の衣生活を模擬した実験を行った。

衣服内温度においては、立位、歩行姿勢では、重心タイプⅡが保温効果が高く、オムツの効果が見られた。また、健常者タイプも高い値を示し、適度なゆとり量は、オ

ムツによる保温効果と同等の保温力が得られたと推測された。

平均皮膚温においては、高い順から示すと、健常者タイプ>重心タイプⅠ>重心タイプⅡとなった。したがって、身体に適したサイズでは、断熱効果の高い空気層が存在するため衣服の保温力は高くなったと考えられる。

身体の正中線上の襟口、腹部、腹部 10cm 下と、身体の下部に行くに従い、着用タイプ別での皮膚温の差は大きくなる傾向が見られた。これは、ゆとり量が大きいほど対流が自由に起き易いためと推測される。

衣服表面温度においては、重心タイプⅡの体幹部が一番低い値を示した。体幹部はオムツの着用により衣服表面まで熱が伝わらなかったためと考えられる。皮膚温 9 点のばらつきは、重心タイプⅡ>重心タイプⅠ>健常者タイプという順に差が大きくなった。ゆとり量が各部位において適切な量を得られない時、身体全体の温度のばらつきが大きくなるという傾向が見られた。これより、重症心身障害児の四肢部のゆとり量過多、オムツ着用が引き起こす全身の温度バランスへの影響の大きさが推測される。

重症心身障害児の衣服内環境の崩れた温度バランスを、いかに改善されうるか検討が必要である。健常者は衣服による気候調節のために重ね着を行うが、重ね着の効果は、一般に、上部に重ねる衣服サイズが下部の衣服よりサイズの大きい方が保温効果がある。また、重ね着によって表面積が増えすぎると、放熱量が増加し、保温効果が減少する。以上より、重症心身障害児は、健常者に比べて四肢部が細く、また、オムツを着用するため腰部のサイズが大きくなるという特徴を持つことがわかった。このような状況下、重症心身障害児は、重ね着による保温効果が健常者の場合と異なることが予想され、重ね着という手段で暖かさを得ることは困難であるということが考えられる。今後、重症心身障害児の身体温度の不均一性を改善し、保温性を高め、快適な衣生活が送れるようにするために衣服内環境からの対応が求められる。

5. まとめ

重症心身障害児は、一般に健常者に比べて、身体の変形が見られ、四肢部が細いという身体形状の特徴がある。そのため、身体サイズと衣服サイズとが不適合な衣服を着用している場合が多い。オムツ着用のため特に下肢部のゆとり量が過多となるという状況がある。以上のような理由から、衣服内環境は健常者と異なることが予想される。

身体サイズと衣服サイズが異なる場合、オムツを着用している場合の衣服内環境に与える影響について検討した。

①静止立位状態では、同サイズであっても、着装形態の違いにより、衣服内の静止空気層は変化し保温性に影響を与えることがわかった。

②本実験においては、オムツ着用による断熱効果が認められた。しかし、重症心身障

害児の生活では、排泄物などによる湿潤状態が考えられるため、一概にオムツが保温性を高めるとは言えない状況にあると思われる。むしろ濡れたオムツを着用している時に放熱量の増加が予想される。

③衣服内の各部位の空気層（ゆとり量）が適切に得られない時、身体全体の温度のばらつきは大きくなる傾向を示した。

今後、重症心身障害児の衣服による生活支援を行うとき、重症心身障害児の衣服内環境が起因する衣服の熱抵抗値の低下や不均一度の増大をいかに改善するかが大きな課題である。

引用文献

1) 多屋淑子, 厚生科学省研究費補助金障害保健福祉総合研究事業, 「重症心身障害児のQOL向上を支援するための衣生活に関する研究」, 平成12年度総括・分担研究報告書 (2001)

厚生科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）

分担研究報告書

重症心身障害児の衣類に関する研究（その2）

分担研究者 中村博志 日本女子大学教授

研究要旨：重症心身障害児(以下、重症児と略)に関する研究は、重症心身障害児が法的に位置付けられた昭和 42 年以来幅を広げた研究に変わりつつあるが、食事や衣類など身近なテーマに関しては、まだまだ、少ない現状にある。このように衣食住に関する研究は、これまでの施設中心の療育から、在宅中心のものへと変化しつつある現在、極めて重要な課題と考えられる。我々は、昨年を引き続いて、重症児における被服が重症児自身に関して、どのような意味を有するのか、あるいは、家族や施設で身近に介護をする人々において、障害児自身の被服がいかなる受け止められ方をしているのか、などに焦点を絞って検討を行った。

衣類を選ぶ時に最も重視する点はサイズと肌触りが多く、少し大きめの衣服を購入し、着せやすいものを重視している事が分かる。衣服のサイズの基準は、健常児と重症心身障害児(者)とでは年齢は同じでもその体型や身長・体重がかなり異なる重症心身障害児(者)においては、その回答が分かれてくるのは当然としても、今後の問題としては、どのような体型でもマッチするような被服の改良が必要になってくるものと考えられる。

1. 始めに

重症心身障害児(以下、重症児と略)に関する研究は、重症心身障害児が法的に位置付けられた昭和 42 年以来幅を広げた研究に変わりつつあるが、食事や衣類など身近なテーマに関しては、まだまだ、少ない現状にある。このように衣食住に関する研究は、これまでの施設中心の療育から、在宅中心のものへと変化しつつある現在、極めて重要な課題と考えられる。

我々は、昨年を引き続いて、重症児における被服が重症児自身に関して、どのような意味を有するのか、あるいは、家族や施設で身近に介護をする人々において、障害児自身の被服がいかなる受け止められ方をしているのか、などに焦点を絞って研究を進めている。もとより、被服は元来、寒さから身を守り、危険から身を守ることから発していると思われるが、現在においては、このような生理的機能のみならず、特に女性においては、ファッションなどの意味を持つ要因の方が大きいと思われる。ノーマライゼーションの考え方が日本においてもかなり普及した現在、このような観点においても、障害児などの療育においてどのように考えられているかという問題点は今後検討していかなければならない点であろうと考えたからである。しかし、ここで注意しておかねばならない事は、重症心身障害児のように自分の関心や意志を十分に周囲の人たちに伝える事が出来ない人々に対しての問題である。この場合、何処までが障害者自身の考えであり、何処までが周囲の人々(家族であったり、施設における介助者であったり)の意見であるかの判断を間違えなくする事が重要であるという事である。

そこで、被服がどのような意識で受け止められているかとの視点で、アンケート調査を行った。勿論、上述のように多くの重症心身障害児(者)は自分の意志を明確にする事は難しい。従って、このような調査は以上のような基本的問題点をもともと含んでいる事を前提としている事をお断りしておかねばなるまい。

2. 研究の方法と対象

昨年度はどのような意識で被服が受け止められているかの視点で、アンケート調査を行った。アンケート(資料1)は、まず、障害児本人に関する事項と家庭環境の事について聞き、次に保護者自身の事について聞き、最後に、衣生活について聞いている。

しかし、昨年度は時間的制約もあり、対象数に限りがあったので、今年度は症例数を増加させ、また、対象者も昨年の在宅の障害者の親のみならず、今年度は施設入所の親もその対象に含めた。これらの環境の違いが、被服にどのような影響を与えるかを知るためである。

調査対象は542例であり、このうち、在宅の方は311名、施設入所の方が198名である。

3. 結果

以下その結果を順次示す事とする。

1. 障害児自身の項目

まず、障害の種類であるが、表1のごとく重症心身障害児(者)が3/4で、大部分を占める。

表1 障害の種類

重症心身障害児(者)	399名	75.3%
身体障害児(者)	62	11.7
知的障害児(者)	63	11.9
その他	6	1.1
合計	530	

障害児(者)自身の性別では、男女ほぼ同数である。

表2 性別

	度数	%
男	258	48.3%
女	276	51.7%
合計	534	

障害児(者)自身の生年月日は、未成年者は約 1/4 に過ぎない。

表3 障害児(者)の生年月日

	人数	%
S4～S23	13	2.4%
S24～S33	55	10.3%
S34～S43	140	26.3%
S44～S53	180	33.8%
S54～S63	111	20.8%
H1～H10	34	6.4%
合計	533	100.0%

現在在宅か、あるいは施設入所中かとの質問では、在宅がほぼ6割を占めた。これは、調査対象が重症心身障害児を守る会中心であり、在宅者を中心として調査であることによる。

表4 在宅か入所か？

	度数	%
在宅	311	61.1%
施設入所	198	38.9%
合計	509	100%

入所時期は次のとおりである。平成に入ってからの方が、6割以上を占めるが、これは全国的割合からは、多少異なる成績といえよう。

表5 入所時期

	入所時期	%
S34～S43	70	14.2%
S44～S53	62	12.6%
S54～S63	32	6.5%
H1～H10	289	8.5%
H11～H14	41	8.3%
合計	494	100.0%

現在の施設での処遇についてどのように思っておられますかとの質問には、大方満足しているが約 2/3 であり、やや不満があるが約 3割を占める。多いに不満があるも

のは約 4%に過ぎない。しかし、この項目に対しての回答は無回答が 65% (355/542) の多くに上っている事に着目すべきであろう。この無回答の中には否定的な意見が多い事が考えられるからである。

表6 施設満足度

	度数	%
大方満足	125	66.5%
やや不満	56	29.8%
大いに不満	7	3.7%
合計	188	100.0%

運動機能に関する質問では、立てる、座れる、寝たきりがほぼ同数であるが、寝たきりは4割と若干多い。

表7 運動機能

	度数	%
立てる	139	26.8%
座れる	169	32.6%
寝たきり	210	40.5%
合計	518	100.0%

理解度は話しかけても話しかけに反応するの程度が約4割と最も多く、単語の意味を理解する・日常会話を理解するなどある程度の会話可能なものが4割を超える。

表8 理解度

		度数	%
有効	殆ど反応しない	31	6.4%
	身体的接触に反応する	52	10.7%
	話しかけに反応する	188	38.8%
	単語の意味を理解する	80	16.5%
	日常会話を理解する	134	27.6%
	合計	485	100.0%

II. 回答者の項目

親の生年月日は、50歳以上が約半数を占め、40台も約3割と高齢化が進んでい

ることを物語っている。

表9 親の生年月日

	親の年齢	%
S2～S3	15	3.9%
S4～S13	18	4.7%
S14～S23	168	43.6%
S24～S33	106	27.5%
S34～S43	44	11.4%
S44～S53	3	0.8%
S54～S63	1	0.3%
T1～H15	30	7.8%
合計	385	100.0%

同居家族の数は、いない、あるいは一人が1割強であり、2～4人で7割を占める。

表10 同居家族の数

	度数	%
	46	
0	16	3.5%
1	52	11.4%
2	94	20.6%
3	123	26.9%
4	108	23.6%
5	38	8.3%
6	17	3.7%
7	8	1.8%
8	1	0.2%
合計	457	100.0%

以上は、主としてフェイスシートに関する質問である。

Ⅲ. 以下に、衣生活に関する質問の結果を述べる。

衣類に関して、主として、機能面を重視しているか、快適さを重視しているかとの

質問では、機能面重視と快適さ重視がほぼ同数である。

表 1 1 機能面を重視しているか、快適さを重視しているか

	度数	%
機能面	233	46.0%
快適性	273	54.0%
合計	506	100.0%

着替えは、どのような時にするかとの質問では、朝起きたときにと外出する時が多い。しかし、汚れるたびにが意外に少ない。

表 1 2 着替えは、どのような時にするか

	度数	%
汚れるたびに	23	7.5%
朝起きたときに	151	49.2%
外出する時	110	35.8%
その他	23	7.5%
合計	307	100.0%

1日平均で何回くらい着替えをするかとの質問では、季節によっても異なるが、夏でも1~2回のものが9割を占めた。

表 1 3 着替え回数(夏)

	度数	%
1回	243	58.0%
2回	135	32.2%
3回	30	7.2%
4回以上	11	2.6%
合計	419	100.0%

衣類の素材に関する質問では、重複回答も含むため総数が多いが、吸湿・吸水性と保温性を重視するものが多い。